

R8(2026)年 共通テスト本試 『松陰快談』 現代語訳

※一部、振り仮名や返り点も補足しています。

次の文章は江戸時代後期の漢学者である長野豊山(一七八三―一八三七)が表したものである。

客問レ余曰、

ある客が私に問うて言った。

「子学レ詩、唐耶、宋耶。」

「あなたは詩を学ぶにあたって、唐詩を手本としているか、あるいは、宋詩を手本としているか。」

曰、「A我不ニ必唐一、不ニ必宋一、

(私は) 答えた。「私は必ずしも唐詩を絶対視しないし、必ずしも宋詩を絶対視しない。」

又不三必不ニ唐宋一。

また、必ずしも唐詩や宋詩を学ばないでもない。

可レ見、不必二字、是我ア宗旨也。」

注目したまえ、 不必の二字、これが私の主要な見解だ。」と。

東坡云、「作レ詩必ニ此詩一、

蘇軾はこう言っている。「詩を作るにあたり、『このような詩でなければならぬ』とする人は、

定知レ非ニ詩人一。」

(その人は) 決して(真の) 詩人ではない。」

可レ謂ニイ知言一矣。

(これこそ、) 見識のある言葉だと言わなければならない。

窃視ニ世之詩流一、

私見では、世の詩人たちの潮流を見ると、

不レ問ニ詩之巧拙一、

詩の上手さ・下手さを問わず、

党レ同 伐レ異、 忿争 如レ狂。

同じ考えの者をひいきして、異なる考えの者を攻撃し、怒って争うのはまるで狂っているかのようだ。

トシムト しかラ

B 是雖 二狭見使 一 然、

これは(彼の)(見識の狭さがそうさせているとはいえ、

ず ますはなは夕がいナラ

C 不 二亦已 駢 一 乎。

なんと愚かなことであろうか。

リ ノきわメテ くちヲのこシテ はくせき なんくわくヲ

有 下 人 極 レ口 罵 二 白石・南郭 一、

言葉を尽くして

新井白石や服部南郭を罵倒して、

もつテ なス ぎ シト

以 為 中 偽 詩 上。

彼らの詩を「偽物の詩だ」とみなしていた人がいた。

よ ムフ みコトヲ ノヲ

D 余 請 レ 観 二 其 詩 一。

私は、その(人自身の) 詩を見せてくれるように求めた。

たツルコト イフちんがニシテ たダ クもちヅテ せいじヲ

立 レ 意 陳 腐、 但 多 用 二 生字 一、

(するとその詩は) 主題の立て方が陳腐で、ただ見慣れない字や言葉多く用いて、

もつテおほフノミ そノせつヲ

以 掩 二 其 拙 一。

それによって自分の下手さを隠しているだけのものだった。

よよりテイヒテク

E 余 因 謂 曰、「白石・南郭 誠 作 二 偽 詩 一、

私はそこで、こう言った。「白石や南郭は確かに『偽物の詩』を作っており、

げしハまことニル しんじヲ

吾 子 誠 作 二 真 詩 一。

あなたは確かに『本物の詩』を作っている。

しかレドモ の ハ たとへバしんがなり

然 吾 子 之 詩、 譬 真 瓦 也。

しかし、 あなたの詩は、たとえるなら『本物の素焼きの器物(=価値のないもの)』だ。

に しの たとへバ ぎぎよくなり

二 子 之 詩、 譬 偽 玉 也。

(それに対して) あの二人の詩は、たとえるなら『偽物の玉(=美しい宝石の模造品)』だ。

の あたひ はるカニ シト

真 瓦 之 価、 迥 在 二 偽 玉 之 下 一。

本物の素焼きの器物の価値は、偽物の玉よりもはるかに下にある。」

【資料】

よおイテ 二 シ へんかうスル

余於レ詩 無所ニ偏好一。

私は詩に関して、
作風の好みが偏ることはありません。

ハ ノ の ヨ よキものハル これヲ

不レ問ニ其風調之異同一、 佳者取レ之。

その詩風が同じか違うかを問わず、
優れたものはそれを（優れていると）評価する。

たダせいかう せしそへニシテ

但生硬・拙俗、

ただし、表現が未熟でかたい感じがしたり、稚拙で低俗だったりして、

ふうゑいスルニキ いんち ものハ

諷詠 無ニ韻致一者、

（その詩を）朗唱すると、気品や風情が感じられないものは、

いへども いフト の ト ル

雖レ曰ニ名人之所レ作、

名声の高い人物の作品だと言われても、

ハすなはず ざル ラなり

我則 不レ取也。

私は（優れていると）評価しない。